落葉（らくよう）と　碩果（せきか）残して　不食（ふしょく）とし
種を育（はぐく）み　春を迎えむ

令和五年元旦

大中臣正比呂

易経に「碩果不食（せきかはくらわされず）」とある。碩果とは、大きい果実を云い、食べ尽されそうになっても、残ったものは他者の手には届かぬという意味である。やがて実は落下するが、その種は新しく芽を吹き繁栄をもたらす、とある。

易では、未来を八卦×八卦の６４種の事象に分類し、その循環で万物の流転を表現する。６４種の卦の交叉パターンには各々に名称があり、その中で山地剥（さんちはく）の卦（か）の解説に碩果不食の教えが記されている。易占は算木(さんぎ)、筮竹(ぜいちく)で行うが、５０本の竹串状の筮竹から無作為に引き当て、その結果を算木と云う木片パターン（卦）に変換する。この占いでは対象者の名前を三度心中で唱え、占いたい内容を強く念じ、更に筮竹を引き当てる直前に短い瞑想の時間を作るのが作法である。即ち、霊界にコンタクトして、現世の状況に従う近未来（概ね１年）の指導を時々に仰ぐ訳である。邪念が降りないように心を正して受ければ、教示は占者に相応しい指導意思が働く。卦の解釈は、同じ卦でも、その人の現況から導かれるのであり、その人にとっての啓示として解釈をしなければならない。さて、諸兄の年頭の啓示は如何に。